

睡眠薬・抗不安薬とフレイル症状との関連についての調査

中島直彦 中央調剤薬局

【目的】

フレイルとは、加齢に伴う様々な機能変化や予備能力の低下によって健康障害を招きやすい状態であり、転倒などの身体的要因、認知機能低下などの精神的要因、社会的要因が相互に影響し、進行すると考えられている。高齢者において、服用に注意が必要な薬剤であるベンゾジアゼピン薬（以下BZ薬）及び非ベンゾジアゼピン薬（以下非BZ薬）などの睡眠薬・抗不安薬には、副作用に筋弛緩作用による転倒や認知機能障害の報告があるため、フレイルの症状に関連があるのではないかと考え調査を行った。

【方法】

2017年4月～6月の期間に、当薬局および系列の薬局7店舗に来局した65歳以上の患者を対象に、厚生労働省が介護予防事業のために作成した基本チェックリストを用い、聞き取り調査を行った。基本チェックリストの総点（No1-20）は介護の必要度、運動機能（No6-10）及び認知機能（No18-20）はフレイルの症状に該当する項目として用い、それぞれ総点：20項目中10項目以上、運動機能：5項目中3項目以上、認知機能：3項目中2項目以上を問題ありとし、BZ系及び非BZ系薬剤服用群（以下服用群）と非服用群においてオッズ比を算出した。

【結果】

有効回答372名の内訳は、服用群108名、非服用群264名であった。総点10項目以上の介護の必要がある患者は19名であった。服用によるオッズ比は、介護の必要あり：2.309（95%CI[0.911-5.853]）、運動機能低下：2.033（95%CI[1.191-3.471]）、認知機能低下：1.893（95%CI[1.204-2.978]）であった。

【結論】

介護の必要性に関しては服用と関連があるとは言えないが、運動機能低下、認知機能低下において、服用群にその確率が高くなることが示唆された。今後、フレイルの進行を予防するためにも、BZ薬及び非BZ薬の副作用の可能性を含め慎重に評価する必要がある。